03　部落差別と向き合う（同和問題）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、こはまもとこがお届けします。

部落差別を解消するために「全国水平社」が創立され、今年で１００年。西日本新聞では、「記者２８歳　私は部落から逃げてきた」という記事が連載され、反響がありました。自ら被差別部落出身であることを明かして書いた西田昌矢さんにお話を伺いました。

【西田さん役】中国地方で生まれた私は、部落差別の実態を知り、不安と焦りから荒れた時期もありました。大学は、故郷から離れて東京に進学しました。

（ナレーター）記者になっても無関心を装っていた西田さんですが、赴任した長崎で９２歳の女性被爆者を取材し、心を揺り動かされます。

【西田さん役】その方は８０代で語り部になるまで、被爆体験を話せませんでした。思い出すのがつらかったことはもちろん、「被爆者なら、嫁にもらわなければよかった」と夫の親戚に言われたことも理由です。平和祈念式典で被爆者代表を務

めた記事が掲載された後、「私の言葉は皆さんに届いたでしょうか」と涙ながらに言われました。私も涙をこらえきれず、「逃げたままでいいのだろうか」と思い、記事を書くことを決めました。

取材で、地元の知人や家族に話を聞きました。驚いたのは、明るくて誰からも好かれる姉が、生まれを気にしていたことです。姉は交際相手を心から好きになる前に、部落出身であることをわざと軽い感じで伝えていました。何かあっても小さい傷で済むように…。

一番取材が難しかったのは母でした。自分の名前も顔も出して、記事を書こうとする私を心配する気持ちが強かったのでしょう。「本当にいいんか？書いたら戻れんで」と何度も言われました。

「あんたが差別のターゲットにならんかっていう不安がある」「あんたには部落じゃない普通の場所で暮らしてほしい」

話すときにも目を合わせず、質問にそっけなく答える母でしたが、私の記事を読んでもらい、最後には納得してくれました。

私は、部落にルーツを持つ誰もが、部落問題に向き合うべきだとは思いません。差別は、社会が生み出したものです。当事者だけに強くなるよう求めるのではなく、社会の問題としてみんなで考え、解決していけたらと思います。

（本文９０６字）